問題提起と提案

2019.5.23

春日文子（SDGs 推進円卓会議構成員、国立環境研究所、Future Earth）

SDGs 実施指針の改訂に向けて、他

1. 地球環境問題の致命的な重大さと緊急性についての認識が必要
   (ア) 過去約 1.2 万年の地球環境の安定（完新世）こそが人類社会・文明の基盤であり、損なわれると地球規模で経済・社会の不安定・混乱のリスクが高まり、日本人も含む人類社会は持続可能でなくなる。
   (イ) 人口増と豊かさ追求の下、従来の直線的な経済・社会運営を続ければ、地球環境（生物圏）システムは Tipping Point を迎え、加速度的かつ不可逆的に環境と社会の破壊が進む。（Hothouse Earth: PNAS 2018）
   (ウ) その意味で SDGs はウェディングケーキ構造であり、土台（環境）を持続可能にできなければ、その上の社会・経済の持続可能性は砂上の楼閣である。
2. 地球規模の課題解決と日本国内の政策との連続性・関連性を持たせるべき
   (ア) 地球規模の環境・社会・経済の持続可能性は、日本社会や国民一人一人の生活の持続可能性の前提である。
   (イ) その意味で、自国民の利益のためにも地球・人類のコモンズをいかなる取組み・ルールのもとに保全するかが SDGs では問われている。
   (ウ) 国内政策、特に地方政策が重視され過ぎると、部分最適が優先され、人類や日本社会全体の持続可能性の課題・視点が軽視される恐れがある。
   (エ) SDGs は地球・人類の共通目標であることを常に意識し、世界の Goals に日本の Goals 達成をどう関わるかの道筋を明確に示す必要がある
3. 現状肯定・自己弁護的な SDGs マッピングではなく、変革・結果指向の議論が必要
   (ア) 現状の認識は重要であるが、SDGs の地球・人類規模の持続可能性課題に取組むには、変革・結果指向が求められる。
   (イ) 将来社会のより全体的・包括的・合理的なビジョンを示した上で、そこから導かれる目標設定からのバックキャスティング設計をするなどが必要。
4. 科学的根拠（エビデンス）に基づく合理的な論理体系と社会のイノベーションの観点が重要
   (ア) 科学技術イノベーションは、デジタル社会、AI 利用、（経済効果を生む）技術的イノベーションだけではない
   (イ) 科学技術を豊かな経済・社会に繋げるには、社会システムのイノベーションが決定的に重要
   (ウ) 次ページに詳細
5. SDGs を通した、地球環境、国際社会への人間としての責任、倫理を共有すべき
   ⇒ 新しい「基本法」が必要

科学からの貢献の提案

1. 地球環境と人間社会の現状についての、継続的な情報提供

2. SDGs の目標設定-行程表作成-達成評価に亘る体系的貢献

SDGs 達成のためには、

1. どこを（何を、どのくらい）目指すのか、という**目標設定**：関係者が合意の上で、説明可能な形で、**エビデンスに基づき**、設定（グローバルには、Future Earth が数的指標設定のための包括的な科学を推進し、また科学的根拠を収集整理する”Earth Commission”の事務局を担当）

2. 目標達成のための**ロードマップ作成**：**Synergy と Trade-off** にも配慮

3. **達成度を評価**：**評価基準と評価方法**が必要

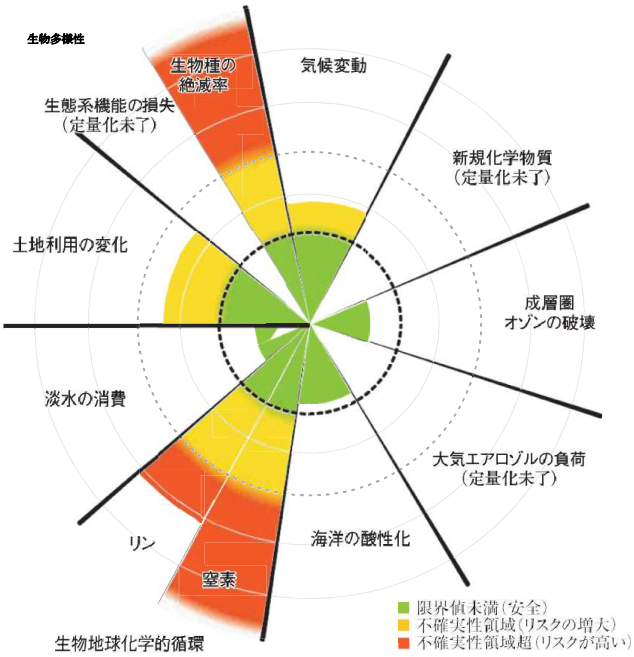
4. これらのステップが、**ローカルレベル**でも**グローバルスケール**でも行われ、互いに**整合**が取れることが必要

提案1. SDGs 実施指針見直しに向けた SDGs 推進円卓会議の活性化と科学的根拠の活用

提案2.『持続可能な社会推進基本法』の制定

- 持続可能な社会と地球環境に対する人間の責任と倫理について謳う
- それと共に、持続可能な社会と地球環境の中で生きることの価値と権利についても明示する
- SDGs 推進は直近の対象だが、2030 年以降も展望して、継続的に活用できる名称にしてはどうか
- 国際社会における日本の位置づけ、役割について、地理的、時間的軸の上で示す
- 国内においては、人口減少、少子高齢化や地球環境変化の影響を現実として直視し、くらしの豊かさや国の繁栄、国際貢献のあり方について、新たに考え直す機会にもすべき

【参考資料】



Planetary Boundaries (Steffen and others, 16 January 2015, Science)

SDGs Wedding Cake（Johan Rockström and Pavan Sukhdev）